

BUDORI

—— 眠れぬ夏の月 ——

北村想

登場人物

ブドリ (六を夢想している少年)

六

猿全弁吉 (さるまたべんきち、売れない芸人。六の育ての親)

デン子 (六の妹)

マブセ博士 (『夏の病院』の院長)

ノキバ (『夏の病院』の看護婦長)

ササノハ (看護婦)

スナゴ (看護婦)

タンザク (患者)

十四号室 (患者、あるいは、野武探偵)

患者たち

羽根月（劇団の演出家）

演出助手の女性

劇団の人々

赤ん坊を抱いたワニ

保母

保育園児

囚われの少女

看護婦たち

医師たち

—— プロロオグ ——

六 「その夜僕は病院の高い塔からひとりの少年が落ちていくのを見ました。その夜僕はど

うしても眠れないのでしかたなく何の用事もなしにふらふらと丘の上の公園墓地まで歩いてやって来たのです。空には月が出ていました。その月を眼球にみたててメスで横一文字に切るかのようにすじ雲が流れていました。公園墓地の丘からは眼下に病院の中庭がよく見えるのです。僕はなんとはなしに月の光で青く沈んだ病院の中庭を見ました。病院は『夏の病院』と呼ばれていて、春でも秋でも冬でもずっと年中『夏の病院』と呼ばれていて、何故そう呼ばれているのかは僕は知りません。その、『夏の病院』の中庭を見ていたのです。中庭には塔が立っています。何のための塔かは知りません。中庭の端に背の高

い塔が立っているのです。その塔のてっぺんに白い服を着た僕と同じくらいの男のこがしやがみこんでいるのが見えました。最初僕は猫でも登っているのかと思いましたが。あるいはシャツが屋根にひっかかっているのかと。でも、その男のこは立ち上がりました。そして僕のほうをたしかに見たのです。僕はあつと小さく叫んでしまいました。それが人間だと分かったからです。そして、塔のてっぺんは人間なんかのぼつたら滑って落ちてしまいました。そうに急な斜面だったからです。落ちたらどうするんだ。僕は胸の中でつぶやきました。なんとかしなくちや、どうしよう、そう思ってポケットへ手をつっこんだり出したり何の役にもたないことをしているそのとき、その男のこが塔からまっさかさまに飛び下りたのです。僕はたしかにそれをこの眼で見、そしてその少年の声をこの耳で聞きました。少年はこう叫びました。『BUDORI!』……。僕はびっくりして病院のほうに向かつて丘を駆けおりました。そして僕の背の五倍はある病院の白い扉にたどりつくるとブルブルと震えて、その扉を抱きながら僕も叫んでいたのです。『ブドリ!ブドリ!』

第一幕 集合Aならびに集合B、その何れかがどちらかに写像される

1 集合A — 1

遠くにオルガンが何か奏でていて

「お兄様あ、お兄様あああつ……」

という女の声が次第に耳障りなくらいに大きくなってくると、突然ハッと眼が覚めるよう

に明るくなって、医者がひとりここにこ笑いながら立っている。

医師 「お目覚めですね。・・・いや、落ち着いて、そう。・・・そう、お座り下さい。

いや、驚きはごもつとも。今、説明いたします。今すぐに、充分に納得のいくように御説明してさしあげます。

女の声はもうないがオルガンの音は相変わらず遠くで何か奏でている。

医師 「ああ、あれね、あのおるがんの音ですね。あれは特になんでもありません。誰かが

弾いているのでしょうか。娯楽室にはおるがんがありますからね。何の曲かな。・・・ああ  
そうか『ささのはさあさら』だ。もうすぐ星まつりですからね。それで、誰かが弾いて  
いるのでしょうか。なかなかいい歌ですね。ふくんふくんさあさらあ、か。・・・  
えっ？私？、私は医者です。あなたの主治医です。あなたの担当の医者です。お分かりに  
ならないかも知れませんが、ここは病院なんです。ええ、そうです。病院です。聖（セン  
ト）アレキセイ病院。むかしここに教会が建っていたんだそうです。聖（セント）アレキ  
セイ寺院といったそうです。それで、その名前をそのまま踏襲して病院の名前にしたんで  
すよ。まあ、町の人々はどのようなつもりでか、このことを『夏の病院』と呼んでいま  
がね。思い出せませんか聖（セント）アレキセイ病院。・・・いや、心配なさらずとも結  
構です。もうすぐ、もうすぐあなたは思いだします。時間の問題です。今にあなたは御自  
分のことを残らず思い出されるでしょう。それは私が請負ます。え？女の声？お兄様です

か。ああ、あの声のことですか。あれは向かいの病棟にいる女です。もう長いあいだここに入院しています。狂っているんです。あ、いや、あなたは心配なさらずとも結構です。あなたはもう治ったのです。いや、治ったも同然、あと一步なんです。そして必ずその一步はおとずれます。すぐに。なぜなら、あなたはあなたのことを思いだささえすればあとはいいのです。

オルガンの音が終わった。

医師 「終わりましたね、おるがん。誰が弾いていたのかな。・・・あ、申しおくれまし

た。私の名前ですよ。きつと覚えていらっしやらないでしょうね。マブセです。この院長もやっているんですが、おぼえてませんよね。いや、いいんです。それでいいんですよ。すぐに思いだしますから。しかし、おるがんはともかく、あの女の声には驚いたでしょうねえ。発作が起きるといつもああなんです。お兄様、お兄様。・・・うるさいんですが、しかし、彼女もかわいそうなんなんです。心中のカタワレなんですよ。互いに両手を縛って上水へ飛び込んだんですが、男は恐くなって逃げたんです。なんでも学生時代は水泳の選手だったそうで、死にそうになって自然に手足が泳ぎはじめたらしいんですね。女のほうはまったく泳ぎのほうは駄目だったらしくて、男にすがりついたのです。男はその女の顔を足で蹴ると、夢中で岸にはいあがったんですよ。女のほうも発見が早くて助けられたんですが、女にしてみりゃ酷なことですよ。なにしろ、愛しあって心中までやらかした男に、土壇場で裏切られたんですからね。しかも、顔を水ん中で蹴っ飛ばされて

ね。いっそ、蹴飛ばされたんなら噛みつきやよかったんだ。その足に、ガブリとね。私ならそうしてますよ。でも、男が水虫だと困るなあ。ま、いいか、水ん中なんだから。しかし、どうして噛みつかなかったんだろなあ。歯が悪かったのかな。虫歯だなきつと。それで噛みついてりゃ水虫と虫歯のいっきうちだ。どっちが勝つだうなあ。どう思います？どっちも虫なんですよ。面白い闘いになると思いませんか。水中で、水虫の足に噛みついた虫歯の歯がグルグルと回っている。痛し痒しというところですねえ。ここで、問題になるとすれば、虫歯の歯が足のどの部分に噛みつくかということ。たとえばそれが小指なら虫歯のほうに勝ちめはないでしょう。なぜなら、足の小指というのは白癬菌の繁殖力が非常に強いところなんです。肉体的にみても、小指ってか弱そうでしょ。ですから、たいてい水虫は小指と薬指の間からはじまるんです。インキンタムシはちがいます。あれは親指と親指のあいだからはじまります。おっと、そうですね。もつと問題にしなくちゃいけない点がありましたよね。男と心中しそなつて狂った女が、何故『お兄様』と叫ぶのかということ。おそらくあの女は芝居してるんです。『ドグラマグラ』かなんかを読んで、それで芝居してるんですよ。何れにしても、私なら入水（じゅすい）なんかしないなあ。これこれ、このほうが確実ですね。（と、剃刀を取り出して）これで喉をスカッと切り裂くんです。これが一番ですね。・・・ね、ちよつと、窓の外をのぞいてください。広場の向こうに塔が見えるでしょ。ほら、ほら、ここへ来て、よく見てください。

マブセと自称した医師の視線が、誰か歩いて自分の前を横切ったかのように動く。

それから、その見えない誰かの肩に彼はそつと手をおいて、塔があるらしい方向を見つめ

ていたが、やおら、その見えないだれかの肩を強くつかむと、見えない誰かの首に剃刀をあてがって、一気にひいた。  
血飛沫の飛ぶ音がした。

—— 「駄目だなあ。・・・」

と言って出てきたのは演出家の羽根月という男である。どうやら、マブセの台詞は芝居の舞台稽古だったらしい。

羽根月 「駄目だよ。剃刀のところ、迫力ないなあ。マブセ博士は病院の院長になりすまし

た殺人狂なんだから、もっと、殺人を享樂しなくっちゃ。

マブセ博士 「でも羽根月さん、相手役がないんじゃないんじや、やっぱり。

羽根月 「相手役はどうしたんだっけ？」

演出助手らしい女性が出てきた。

演助 「病院へ行きました。

羽根月 「病院？どこか悪いのか。

演助 「いえ、見学だそうです。

羽根月 「見学？」

演助 「はい。実際に精神病院を見学して、参考にしたいと。

羽根月「あそこへ行ったのか。

演助「はい。

羽根月「熱心だな。

演助「はい。

羽根月「熱心なのはいいが、稽古には来てもらわないと困るねえ。

演助「すみません。

羽根月「こまっちやうなあ。

演助「どうしましょ。

マブセ博士「ここんところ、まだやりますか？

羽根月「じゃあ、看護婦のシーンに移ろう。笹飾り持ってきて。

演助「はい。分かりました。

大きな笹飾りが運ばれてきて、みな、舞台から去った。明かりが落ちて。  
・  
・  
・

2 集合B — 1

看護婦がひとり、笹飾りに短冊をぶらさげている。

別の看護婦が出てきて、



——「ササノハさん、

ササノハ「あら、スナゴさん、何？

スナゴ「院長先生見なかった？

ササノハ「見てないわ。

スナゴ「あらそう。困ったな。

ササノハ「ねえ、手伝ってくんない。これ、いがいと大変なのよ。

スナゴ「ササノハさん不器用だもんね。

ササノハ「あら、言ってくれるわね。

スナゴ「ササノハさんが、笹の葉に短冊飾りか。

ササノハ「冗談言っていないでお願いよ。

スナゴ「でもあたし、院長先生捜さなくっちゃ。

ササノハ「急ぎの用事なの？

スナゴ「そうでもないんだけど、また、あれなの。

ササノハ「え、また、あれ？

スナゴ「そ。

ササノハ「じゃあ、私もいっしょに捜してあげるわ。

スナゴ「ありがとう。

ササノハ「だからちよつと、手伝ってよ。もうすぐ終わりだから。

スナゴ「いいわよ。

ササノハ「ねえスナゴさん、

スナゴ「え？

ササノハ「七夕の由来って知ってる？

スナゴ「さあ、知らないわ。ササノハさん知ってるの？

ササノハ「もちよ。あのね、中国に乞巧奠という織姫星を祀るおまつりがあるのよね。

スナゴ「キツコウデン。

ササノハ「そう。

スナゴ「なんかソースみたい。

ササノハ「お習字の上達とか、裁縫の上達とかをお願いするおまつりなんですって。

スナゴ「ふーん。

ササノハ「笹飾りに短冊を吊るすでしょ。あれに字を書くのはそのためなんだって。だか

らね、短冊に書くお願いごとも、お習字の上達とか、手芸裁縫の上達に限られていたんだ  
って。

スナゴ「ふーん。

ササノハ「この乞巧奠に、日本の習俗がまぜこぜになったのが七夕まつり。

スナゴ「へーえ。

ササノハ「日本の習俗って何だか分かる？

スナゴ「何なの？

ササノハ「雨乞いなんだって。

スナゴ「あまごい。

ササノハ「そう。

スナゴ「星のおまつりなの？

ササノハ「そう。七夕雨って行ってね、笹の葉に吊るした短冊が流れてしまうほど雨が降れば、その年は豊作になるんだって。

スナゴ「へーえ、すごいわね。ササノハさん、学があるじゃない。

ササノハ「見直した？

スナゴ「うん。

ササノハ「さて、おしまい。さあ、院長先生を捜しに行きましょう。

スナゴ「はい。

看護婦二人、去った。

キョロキョロしながら出てきたのは六だ。短冊などを読んでいると、婦長のノキバが現れる。

ノキバ「もし、

六「（ノキバに振り向いた）

ノキバ「あなた、あれですか。

六「え、あ、はい、そうです。

ノキバ「見学の？

六「はい。見学の。

ノキバ「かつてにウロウロされちゃ、困りますね。

六「すいません。ずっと待ってたんですが、誰も案内の方がいらつしやらないので。

ノキバ「案内といっても、ここは観光地じゃないんですからね、案内を仕事にしている者

なんぞおりません。手のあいている者がやるんです。普通はこういう病院は一般の方にお見せしたりしないんですよ。でもね、うちは院長がひらけた方ですから特別なんですよ。

六「はい。

ノキバ「それで、どういう件で、御見学を御希望でしたっけ？

六「はい。じつは今度うちの劇団で、こういう病院を舞台にした芝居をやるもんで。それで、一度その、見たいと。

ノキバ「お名前は？

六「劇団のですか。

ノキバ「どちらも。劇団もあなたも、どちらもです。

六「僕は六です。猿全六、漢数字の六と書きます。

ノキバ「六さんね。それで？

六「それでって？

ノキバ「劇団のお名前。

六「21世紀ドッグスです。

ノキバ「……

六「あの、二十一世紀の犬という意味です。

ノキバ「文学座とか、俳優座とか、青年座とかいうのではないんですか。

六「いえ、そういう、新劇の関係じゃないんです。

ノキバ 「前衛劇団？」

六 「いえ、その、同好の士が集まって、自分たちのオリジナルな芝居をやってる劇団なんです。

ノキバ 「あ、そう。

六 「御存知ないですか、僕たちよく北村想の作品をやるんです。

ノキバ 「北村想なら知ってますよ。

六 「やつぱり。ああ、有名なんだ。

ノキバ 「北村想ならうちの患者ですよ。

六 「え！

ノキバ 「入院してるわけじゃありませんが、通院はしていますよ。

六 「あの人、どこが悪いんですか。

ノキバ 「どこかってあなた、ここは精神病院ですよ。おつむの具合が悪いのに決まっていますよ。

六 「あの人、おつむ、病気なんですか。

ノキバ 「ま、プライバシーですから、くわしいことは言えませんが、・・・あなた、秘密守れますか？

六 「はい。

ノキバ 「じゃあお教えしましょう。ちよつとこつちへ。

六 「はい。

ノキバ 「ゴニヨゴニヨゴニヨ。(耳打ちする)

六「え！そうなんですか。

ノキバ「そうです。

六「ほんとかなあ。

ノキバ「ほんとですよ。あなた、何もされませんでした？

六「ちよつと、触られたりしました。

ノキバ「でしょ。この病院へだって、治療にというよりは看護婦目当てに来るんだから。

六「そうなんですか。ふーん。

ノキバ「そう。ところで、どんなお芝居をおやりになるんですか。

六「はい、その・・・

ノキバ「いいですよ、どんなものでも、別にかまやしません。差別だとか誤解していると

か、愚弄しているとか、そんなこと言いやしません。そういうことをとやかく言う人もお

りませんが、私は言いません。作りごとが事実と違うのは当たり前ですからね。

六「はい。その、スリラーなんです。

ノキバ「スリラーね。なるほど、はいよくある話ですね。昔から精神病院というものは純

文学もよくとりあげますが、例えば北杜夫の『楡家の人々』武田泰淳の『富士』とかね。

それから大衆文学がとりあげられる場合はたいい探偵趣味になりますね。マブセ博士の話で

すか。

六「！よく御存知ですね。驚いたなあ。

ノキバ「精神病院が舞台でスリラーとなれば、マブセ博士かカリガリ博士、あと有名なも

のでは『ドグラマグラ』ですか。それぐらいは職業上、読んでおりますから。

六「はい。そのマブセ博士をやるんです。

ノキバ「院長が狂人と入れ換わっているんですね。それで、たしか、抜道か何かがあった、狂人のほうは夜な夜な街へ出ては殺人をおかす。そうでしたね。

六「はい。そうです。だいたい、そうです。それでとある少女がマブセ博士に誘拐されて

病院に閉じ込められるんです。それを救いだしに来るのが主人公の少年と探偵です。探偵は患者に化けて潜入しているんです。少年は見学者を装って、病院には入りこみます。……あの、もっとお話したほうがいいでしょうか。

ノキバ「……（聞いてなかったらしい）え？・

六「芝居のストーリー。

ノキバ「いえ、芝居そのものには私、興味ありませんから。さてでは、御案内してさしあげましょうか。……よろしいですか、うちは解放治療をしておりますが、中には重症の患者もおります。私について歩いて下さい。くれぐれもひとりでウロウロなさらないように。

六「はい。

とオルガンが聞こえてくる。

六「？

ノキバ「オルガンですね。誰か娯楽室にあるものを弾いているのでしょうか。もうすぐ星ま

つりですからね。くささのはさらさらですね。その笹飾りもそのためのものです。ここ

ではなんでも外と同じようにするんですよ。お雛祭も七夕も。

ふたり、歩き始めた。

ノキバ「ああ、申し遅れました。私、ノキバといいます。婦長を勤めております。ところで、どこをお見せすれば、よろしいですか。

六「え？

ノキバ「ですから、どこがご覧になりたいんですか？御見学でしょ。

六「はい。・・・

ノキバ「おっしゃってください。

六「では、塔を。

ノキバ「え？

六「塔があるでしょ。

ノキバ「・・・塔ですか。・・・

六「はい。

明かりがスツと落ちた。



患者らしき者数人、歌いながらオルガンをはこんできた。

バナとねじの日々（サンバのリズムで）

バナとねじの日々 バネとねじの日々

バナとねじの日々 バネとねじの日々

バナとねじの日々 バネとねじの日々

バナとねじの日々 バネとねじの日々

ヤーー切れたバナと飛んだねじと

オウーそれがおいらのおつむ

花を愛せばいい 人を愛するように

人を愛せばいい 花を愛するように

そしてあした すべてに おさらばだ

百日百晩 バネとねじの日々

千日千夜 バネとねじの日々

一万一日 バネとねじの日々

十万十日 バネとねじの日々

バネとねじの日々　バネとねじの日々  
バネとねじの日々　バネとねじの日々  
バネとねじの日々　バネとねじの日々  
バネとねじの日々　バネとねじの日々

オルガンを置くとふたり残してあとは去った。残ったひとりがオルガンの裏に隠れた。隠れたほうを十四号室、ボツンと立っているのをタンザクと呼ぶ。

看護婦のササノハが来た。

ササノハ「タンザクさん、十四号室さん見掛けませんでしたか？

タンザク「さあ。うーん（考え込む）

ササノハ「見なかったのね。（行こうとする）

タンザク「あ、あのちよつと、ちよつと待ってください。今考えますから。

ササノハ「いいの、いいのよ、そんなに考えこまなくたって。

タンザク「ちよつと待ってください。いいですか。いいですね。うーん。

ササノハ「たいしたことじゃないから、いいの、そんなに考えこまなくたって。

タンザク「いいえ、頭は生きているうちに使わなくてはいけません。僕の考えでは、十四

号室はきつとこの辺にいます。

ササノハ「あら、どうして？

タンザク「だって、さつき十四号室がオルガンの裏に隠れるの、見たもん。

ササノハ「え？」

と、その十四号室がオルガンの上にひよいと現れた。アイパッチなんかしている。当人は変装のつもりらしい。

十四号室「いる！必ずいる。十四号室は必ずこの辺にいる。私にはそれが分かる。えらい

！私はえらい。ふふふふ、隠れても無駄だ。出てこい十四号室！お前が仕組んだ連続殺人事件の数々、この私が見破った！・・・出てこい！出てこい十四号室！フフフフ、はははは・・・あるときは片目の運転手、またあるときは盲の運転手、しかしてその実体は！普通の運転手だ！どうだ驚いたか。

タンザク「分かった。この男は、この男は・・・うーん。

ササノハ「十四号室さん、院長がお呼びです。院長室のほうへ急いできてくださいね。

ササノハ、そう言って去った。

十四号室「タンザク、あの女のあとをつけろ。

タンザク「どうして？」

十四号室「俺の変装を見破るとは、あの女、ただものではない。

タンザク「するとあんたは、十四号室！」

十四号室「そうだ。おまえもちよつとやってみろ。（アイパッチを渡す）

タンザク 「あるときは片目の運転手、またあるときも片目の運転手、しかしてその実体は

片目の運転手。

十四号室 「うまい、見事な化けっぷりだ。

タンザク 「院長が用事だっていったよ。

十四号室 「何で、そんなことお前が知ってるんだ。

タンザク 「だって、いま看護婦のササノハさんがいったもん。

十四号室 「すごい記憶力だなあ。お前、探偵になれるよ。

タンザク 「だって俺、ここくる前は探偵だったもん。

十四号室 「よし、じゃあ、その探偵の推理力で推理しろ。

タンザク 「なにを？

十四号室 「決まってるじゃないか。これから起こる事件のことをだ。

タンザク 「うーん、それは難しい質問だなあ。

十四号室 「推理のしがいがあるだろう。

タンザク 「まず殺されるのは、

十四号室 「ふむふむ、殺人事件があるわけか。

タンザク 「うーん、

十四号室 「さあ、それは、

タンザク 「あんただ。

十四号室 「！なんで？

タンザク 「だって推理だから。

十四号室 「その推理の根拠は？」

タンザク 「ない。」

十四号室 「根拠のない推理でなんで俺が殺されなきゃなんないの？」

タンザク 「だって、誰かが死なないと事件になんないもん。」

十四号室 「ちっ、つきあつてられないね。さて、じゃあ、院長のところへでも行ってこようかなと。」

タンザク 「うーん。」

十四号室 「まだ推理があんの？」

タンザク 「だって、犯人が誰かまだ推理してないもん。」

十四号室 「あつそ、まあ、ごゆっくり。そんじゃ。」

十四号室 去つて。

タンザク 「あつ！・・・犯人は院長だ。教えてやんなきゃ。」

後を追うようにタンザクも去つた。

と、演助が出てきて、

演助 「先生、猿全さんがおみえですけど。」

羽根月 「（声だけ）猿全つて、あの六ちゃんのお父さんか。」

演助 「はい。

羽根月 「(出てくる) また、劇団に入れろって言うんだろ。

演助 「だと思いません。

羽根月 「しゃあねえなあ、この忙しいときに。なんで追い返さないんだ。

演助 「すみません。あの、留守だって言いましたよか。

羽根月 「そうだな。

なんて言ってるところへ猿全、デン子とともにドカドカと。

猿全 「先生、先生、いやあ、どうもせがれがお世話になりっぱなしで、どうも、お

礼のひとつもいたしませんで、いやあ、どうも。

羽根月 「どうも。

デン子 「あ、笹飾りだ。お父つあん、笹飾りだ。

猿全 「こらこら、静かにしねえか。それは舞台装置だからさわっちゃ駄目だぜ。ね、そう

でしょ。

演助 「はい。

羽根月 「今日は何か。今、六ちゃんは外に出てますが。

猿全 「いえいえ、六なんざに用はねえんで。あつてもあいつとは、毎日家で顔あわしてま

すから、そのときすましやいいんで。今日は、ほかならぬ先生に、ひとつこの、猿全弁吉

の芸を見てもらって、そのひとつ御批評をたまわろうかと。

羽根月「芸ですか。

猿全「へい。私だって売れちゃいませんが、芸人ですからね。今日はそのなんといいます

か、この現代にマッチした、軽いふんいきの新ネタを二、三、先生にござんにいれようと思ってるんですが。な、デン子。

デン子「うん。

猿全「まあ、さっきこのデン子を相手にやりましたら、これが思いのほかうけましてね。

な、デン子。

デン子「うん、おもしろかった。

羽根月「分かりました。じゃ、ちよつと見せてもらいましょう。

演助「あの、

羽根月「座員には休憩だって言っとけ。

演助「はい。（行こうとするが）

羽根月「あ、待った。君も一緒に見ていけ。

演助「え？

羽根月「（小声で）俺ひとりじゃ、たまらんよ。

猿全「これはなるべく大勢にござんにいれたいです。

羽根月「君、

演助「はい。

羽根月「いっそのこと、ここに座員を集めろ。

演助「はい。（行く）

猿全「(あーあー、なんつって、発声練習なんかしている)

劇団員がぞろぞろと集まった。またか、というような顔で、苦笑しながら。

羽根月「それじゃ、猿全さん、始めてください。

猿全「はい。えー、あー、私は売れない芸人の猿全でございます。猿全と申しましても下

着じゃございません。ははははは。(自分でうける) あれは猿股、私は猿全、えー、き  
ようはひとつ、新ネタでみなさんに挑戦でございます。

デン子 hands 叩いたので、みなさん、しかたなく手をたたく。クスクスとけっこうおもしろがっている。

猿全「では、こばなしでございます。私、このあいだから、豚を飼っております、この

豚をまるまる太らせて、肉屋に売ろうと思っておるんですが、このまえ豚にもっと太れ、  
もっと太れ、と言いましたら、豚がもんくを言います。なんともんくを言ったかといいま  
すと、これが豚だけに、ブーブーいきました。……

どうだ、と言わんばかりの猿全。羽根月はこめかみを指でつつ突いている。演助は心配そ  
うに羽根月をみている。座員はあつけにとられたり、笑ったり、笑いをこらえたり、顔を  
ひきつらせたり、いろいろだ。デン子だけがうけている。



猿全「では、第二弾。えー、私このあいだから牛を飼っております、これで荷物を運んだりしております。ところが、このあいだ、牛が荷物を運ぶのにもんくを言いました。私のはやく歩けといいましたら、牛が動けないと言います。どういうふうに言うかといいますと、これが、牛だけに、モー動けない。

どうだ、と言わんばかりの猿全。羽根月は頭を抱え込んだ。座員のひとりが「これ、マジ？」なんて言ってる。デン子にはうけている。

猿全「では、第三弾。私、このあいだ、動物園へ行きました。それでパンダを見てきました。それでパンダが何を食べてるのかよく見ましたら、なんと笹ではありません。何を食べているのかといいますと、動物がパンダだけに、パンだ。

どうだ、と言わんばかりの猿全。羽根月は咳をひとつした。座員はずっこけた。デン子にはうける。

猿全「どうですか。面白いでしょ。では、第四弾。

羽根月「猿全さん。

猿全「はい。

羽根月「なかなか、面白いと思うんですが、どうでしょう、あと、ひとひねりあったほう

がよろしいんじゃないでしょうか。

猿全 「ひとひねり、ですか。例えば？」

羽根月 「うーん、例えば、そうですね、おい・・君（と座員のひとりを指名して）例えば  
どうなるか、君の考えを言ってみたまえ。

—— 「はい。あの、いや、僕は今のままで充分面白いと思います。

猿全 「あ、そうですね。はははは。いやあ、私も自信はあったんですが。

羽根月 「（頭をかきながら）まあ、聞いている人の期待を裏切らないという点では、いい  
んじゃないでしょうかね。

猿全 「そうですね、私、このネタをもちっと研きまして、来週からでも演芸場の舞台にの  
せようかと思ってるんです。いやあ、どうもありがとうございます。

演助 「あの、先生、六ちゃん帰ってきました。

羽根月 「あ、そうかよし、稽古のつづきやるぞ。猿全さんそれじゃ、あの、稽古しますん  
で。

猿全 「そうですね。そいじゃ、私はこれで。おいデン子、帰るよ。

羽根月 「さ、稽古だ。稽古だ。

座員たち散らばって消える。猿全もデン子も帰った。

演助 「どこからいきます？

羽根月 「じゃあ、えーと、病院の中庭のところからだ。ノキバと六、塔のところ。

明かりが消えて、また明るくなる。

4 集合B―2

塔の前。ノキバと六が出てくる。

ノキバ「中庭です、あなたのおっしゃってた塔というのはこれのことですか？

六「そうです。

ノキバ「この塔がなにか？

六「この塔は何のためにあるのです？

ノキバ「さあ……。私もよく知りません。むかし、ここに教会があつたことは御存知ですか？

六「はい。聞いています。

ノキバ「そのときの、その教会の建物の一部が残ったものらしいんですが、もちろん、何

故この塔だけを残したのか、それは私、存じあげません。いまでは全く使用されておりません。立ち入り禁止になっています。

六「ブドリ。

ノキバ「え？

六「ブドリ。」

ノキバ「なんですか？

六「実は、僕、この塔のてっぺんから人が落ちるのを見たんです。

ノキバ「？

六「僕と同じくらいの少年が、月の夜に、あそこのてっぺんから、・・・その子、おちぎ

わに『ブドリ』と叫んだんです。ほんとうをいうと、芝居のための見学というのは嘘で、

今日はそのことを訊ねようと思って、僕、ここに来たんです。

ノキバ「それは、いつのことです？

六「つい、十日ほど前です。

ノキバ「おかしなことを、おっしゃるんですね、あなた。それ、なにかのまちがい、

六「いえ、ちゃんと、確かに見たんです。声も聞きました。

ノキバ「あの塔の？

六「はい。

ノキバ「てっぺんから？

六「はい。

ノキバ「人が？

六「はい。

ノキバ「落ちた？・・・

六「・・・はい。

ノキバ「十日ほど前にですか。

六「そうです。

ノキバ「そういつた事故はこのところ、起きてはおりませんがねえ。・・・いえね、つ

い四、五年前までは時々、あそこから飛び下り自殺を企てたりする者が、あつたんですがね。今は誰も入れないように扉は鎖で閉ざされておりますしねえ。・・・

六「でも、

ノキバ「別に私、隠しているわけじゃありませんよ。ところで、その飛び下りた少年は、

その、『ブドリ』と叫んだんですか。

六「はい。『ブドリ』って何でしょう。

ノキバ「『ブドリ』といいますのは、

六「御存知なんですか！

ノキバ「別にかくしだてするほどのことじゃありませんよ。『ブドリ』というのはトラン

シルバニヤ地方の方言で『眠れぬ夏の月』という意味ですが、

六「眠れぬ夏の月。

ノキバ「精神医学用語で、無眠症のことを意味しますし、

六「無眠症。

ノキバ「人の名前でもありません。

六「人の名前！

ノキバ「無眠症というのは、不眠症とはまた違うんですよ。不眠症というのは、眠れない

病気ではなくて、眠れないことを気に病む病気です。自分がよく眠れてないんじゃないかと不安になって、ノイローゼに陥るんですね。ところが無眠症は違います。無眠症という

のは類まれな奇病のひとつで、ある時から突然、眠らなくなるんです。二十四時間まったく眠らないんです。導眠剤や、睡眠薬を投与してもまったく眠らないんです。この病院にもそういう患者がひとりだけおられます。その患者は生まれてこのかた、一度も眠ったことがないのですよ。十五歳の少年ですがね、私どもは彼をブドリと呼んでいます。

六「それじゃあ、僕が見たのは、そのブドリという無眠症の少年だ！」

ノキバ「そんな馬鹿なことはないでしょう。」

六「何故です？」

ノキバ「あの塔のてっぺんから落ちたのなら、命がないでしょう。」

六「それは、そうだと思います。」

ノキバ「ブドリ少年なら、生きてピンピンしていますよ。」

六「ほんとですか。」

ノキバ「ええ。」

六「その少年に会わせていただけませんか。」

ノキバ「かまいませんよ。」

六「お願いします。」

ノキバ「それでは、こちらへどうぞ。」

六「はい。」

ノキバ「ところで、

六「え？」

ノキバ「無眠症の人間でも夢を見ることがあるんですよ。」

六「夢というと？」

ノキバ「私どもが眠っている時に見るような夢です。

六「どうやって見るんですか。眠らないのに。」

ノキバ「脳波をとってみますとね、眠っていて夢をみているときにしか出ない脳波が、一

定の時間現れるんです。

六「それはどういうことなんですか？」

ノキバ「ですから、彼はその時間、目覚めているのに、夢を見ているんです。もし、興味

がおありなら、院長にでもお聞きになればよろしいでしょう。院長は彼の、そのブドリ少

年の主治医ですから。

六「はい。？（塔に振り向いた）」

ノキバ「どうされました？」

六「何か聞こえませんでしたか。」

ノキバ「え？」

六「塔の上のほうから。」

ノキバ「いいえ。」

六「僕には聞こえました。女の声でした。」

ノキバ「ほほほほほほほほほほ……」

ノキバと六が去ると、劇団員たちがいそがしくたちまわって院長室をつくる。

——「机はもうすこし右に・・・」

とか、——「椅子は宙に浮かせて・・・」

とか演助の声が幾つかとんで、

窓の向こうの遠見には「塔」が見える。

ノキバと六が入ってきた。院長はいない。

ノキバ「院長は留守のようですね。たぶん病棟のほうでしょう。呼んできますから、ここ

でお待ちになって下さい。ブドリ少年のことなどお聞きになればいいでしょう。

六「どうも御親切に谢谢您。

ノキバ「いいえ。では。」

と、ノキバ去った。

六は塔を見ている。

と、机の下から十四号室が、ぬっと出てきた。

十四号室「六くん。

六「え？

十四号室「しつ、私だ。

六「あつ、野武さん。（注・野武のぶ）



十四号室「そう、私立探偵の野武光一だ。もともと、ここじゃ患者で十四号室と呼ばれている。

六「患者に化けて忍び込んでいたんですね。

野武「そうだ。これではなかなか気違いのまねも大変だぞ。

六「それで、どうなんです。

野武「確証はないが、問題はあの塔だなやっぱり。

六「やっぱりそうですか。

野武「彼女はあの塔に幽閉されているに違いない。私はさつき院長のマブセ博士にあった

が、あれはどうみてもホンモノの医者じゃないね。それは君がその眼で確かめればいいだろう。

六「はい。

野武「私はあの塔をこれから調べるつもりだ。また、どこかで会おう。

六「あの。

野武「？

六「ブドリのことなんですが。

野武「君が見た少年だね。

六「ええ。実は看護婦長の話では、ここに入院している患者で、ちゃんと生きてるっていうんです。

野武「ノキバ婦長がそう言ったのか。

六「はい。無眠症の少年だって。

野武「さて、ぼくはついぞそういう少年は見掛けないな。あの婦長、どうもただの看護婦

じゃあないな。ふーむ。ぼくの勘では、そのブドリとかいし少年も、マブセ博士の犯罪と何か関係があるな。……おっと、誰か来たようだな。それじゃ、これで。

十四号室はそう言うと、六にウインクをして立ち去った。

入れ換わりにノキバと院長のマブセ博士、そして、数名の医師と看護婦が入ってきた。

ノキバ「この方がその方です。（と六を紹介した）

六「猿全六です。見学にきました。

マブセ博士「ようこそ。私がこの病院の院長、マブセ博士です。見学の方を丁重にもてなすのは当病院のしきたりです。まあ、お気楽に、おかけなさい。

六「はい。

マブセ博士「御挨拶がわりにひとつ、歌をうたわせてもらいますが、よろしいですか。

六「？・・

マブセ博士「歌を一曲歌いたいと申しておるのです。

六「ウタ？ですか。

マブセ博士「そうです。

六「ええ、はい、どうぞ。

マブセ博士「医者がかたくるしい威厳をもって人と接するのはもはや時代遅れです。まし

てや精神科医たるや、患者の心のなかに溶け込んでいかねばなりませんから、まず、自ら

を解放してしやらねばなりません。そこで私は歌を歌います。私は私の歌に私の医学的指針を歌います。お聞きなさい。題して『これからの医学』

マブセ博士は白衣をとった。と半身裸で、ラメのパンツ、黒いストッキングを真つ赤なガーターでとめている。まるでパンクファッションだ。

#### これからの医学

η 昔むかしから 今のいままで

時はむなしくながれてゆき

人は病におかされる

見よ 超人がいる

しかし 奴はヘルニアだ

腰にアルミのケトルをあてろ

見よ 巨人がいる

しかし 奴はヘルペスだ

耳にシルクの栓をしてやれ

見よ 哲人がある

しかし 奴は脱毛症だ

頭にブリキのフライパンを打て

見よ 仙人がいる

しかし やつはデコボコだ

背中に鉛のピッケルを刺せ

見よ 人間がいる

しかし 奴は病気だ

面白い手術をしてやれ

これからの医学は

必殺だ

〔セリフ〕—— 会えなくなつて炎と燃えよ恋心！

マブセ博士「いかがですか。とてもシュールだったでしょ。この歌を考えついたのは、つ

いこのあいだです。このあいだ、私のところに精神分裂症の患者がきたのです。私はその

患者にこう言いました。『おつ、分裂してますね。』そうしたら、その患者はなんて言っ

たと思います？その患者はこう言ったのです。『分裂？それは前後にですか。それとも左

右にですか？』……ははははは。愉快でしょ。

六「……。

マブセ博士「これをごらん下さい。（と六に一枚の紙きれをさしだした）

六「（紙きれを手に取る）

マブセ博士「読んでごらん下さい。私はいま、その歌詞に曲をつけようと思っ

す。

六「……

マブセ博士「声を出して。

六「このまま離さないで。・・・

マブセ博士「そう。そうです。その歌のタイトルは『このまま肉だんご』といいます。

六「このまま離さないで 朝まで抱いていて

きつくきつく抱きしめていて

背骨折れてもかまわない

アバラ砕けてもいい

骨盤はずれても好き

恥骨つぶれてもそのまま

ああ あなたにまるめこまれて

私 肉だんごになってしまいたい

そしたらあなたそれに

ソースかけて食べて

肉だんごになった裸の私を

噛みしめて 食べて

食べて 食べて 食べて

私 もう このまま肉だんご

マブセ博士「そうそう。なかなかうまいじゃないですか。お芝居の心得でもあるんですか  
な。

ノキバ「院長、この方は劇団のかたなんです。

マブセ博士「ああ、そうでしたか。実をいいますと、私も昔は役者にあこがれました。そ

れでこの病院には劇団もあります。演劇を通じて患者を治療する精神医学の一派もありますが、私は純粹に娯楽として、ここの患者の連中に芝居をやらせています。いま、今度の七夕まつりの夜の発表会にむけて、稽古がすすんでいることでしょう。なんならあとでご覧になるとよろしい。

六「へー、そうですか。どういうお芝居をなさるんですか。日本のものですか。それとも

やっぱりシェイクスピアとか。

マブセ博士「オリジナルです。

六「オリジナル。それはたいへんですね。

マブセ博士「当病院に通院している患者の中に、劇作家がおりまして、その彼に頼んで書

き下ろしてもらった作品です。題名がえーと、なんてったつけ？

医師1「(耳打ちする)

マブセ博士「ああ、そうです。『BUDORI——眠れぬ夏の月』です。とてもロマンチ

ックなタイトルですが、内容はスリラーらしいです。殺人狂の博士が出てくるのです。なんといいましたか……

ノキバ「マブセ博士です。

マブセ博士「そうです。マブセ博士です。その男がとある少女を誘拐して、病院の塔に閉

じ込めるのです。さあ、彼女を救いだすために探偵とヒーローの少年が勇敢にも病院に侵入します。

六「それは……

マブセ博士「どうしました？

六「それは、うちの劇団が稽古してる芝居です。

マブセ博士「知っております。その参考にするために、あなたはここを御見学にいらした  
んでしたね。

六「そう、です。

マブセ博士「それとも、見学と称して、あの塔を探りにきたのですか。

六「え？

マブセ博士「ですから、見学とはあくまで表むきで、実はあなたはここの偵察にみえたん  
でしょ？

六「そんなことはありません。

マブセ博士「どちらなんです？

六「ですから、見学です。

マブセ博士「あの探偵をここへ連れてこい。

医師たち、後手に縛られた十四号室（野武）をドアからひきずり入れた。

六「野武さん。

マブセ博士「まぬけな探偵ですね、この人は。私に正体が見破れないと思ったのですか。

野武「六ちゃん、どじを踏んだよ。

マブセ博士「これでも、やはり見学ですか？

六「ばれちゃったんなら仕方ないや。ほんとうは偵察のためにやってきたんだ。

マブセ博士「そうすると、六さん、まるであなたは劇中の登場人物ですね。

六「まさか、これは芝居なんかじゃないぞ。

マブセ博士「だって、あなたがたの劇団のやっている芝居というのは、主人公の少年が、

見学と偽って、敵のアジトである病院へ潜入するお話でしょ？

六「そ、そうだけど。・・・

マブセ博士「もし、これがお芝居などでなく、あなたも劇中の登場人物でないとしたら、

いま、ここで起こっていることはなんでしょう？怪人マブセ博士に捕まってしまった探偵と、追いつめられたヒーローの少年が、マブセ博士と対峙しているところですね。ところで、それはまさにあなたが劇団で稽古なさっているお芝居だ。それであなたはそのお芝居の参考にするために、わざわざこの病院に見学にいらした。しかし、それは表むきで実はあなたはこの病院を偵察にいらした。なぜなら、この病院の塔にはマブセ博士に誘拐された少女が幽閉されているらしいから。ところが、それはあなたの劇団が稽古している芝居なんですよね。六さん、そもそもあなたは何者です？

六「僕は劇団21世紀ドッグスの劇団員だ！

マブセ博士「その劇団員がここへ何しにきたのです？

六「芝居の参考になるだろうと思って見学に・・・

マブセ博士「というのは嘘で、実はこのマブセ博士と、あの塔を探りにきたんですよ？

六「そ、そうだ。

マブセ博士「だから、それはあなたが稽古しているお芝居だということです。



六 「そう、その芝居の参考にするために・

マブセ博士 「それは、表むきの理由、実は

六 「怪人マブセ博士を偵察に・

マブセ博士 「来る少年というのは、君の芝居での役どころだ。

六 「だから、その参考のために・

マブセ博士 「頭がグルグルしてきましたか。・

断ち切る答えはひとつしかない。

六 「どうということ？

マブセ博士 「この十四号室すなわち野武探偵は、この病院の本当の患者だということだ。

六 「え？

マブセ博士 「もちろん役者でもある。言ったでしょ、この病院には劇団があるんだって。

そして、この男は今度の芝居では患者に化けて病院に忍びこむ探偵の役なんです。そして

その劇団の名前は、『21世紀ドッグス』

六 「そんなバカな！

マブセ博士 「これでツジツマが合うでしょ。君が所属している劇団というのは、この病院

の中にある劇団です。稽古している芝居が同じであるのも当たり前です。

六 「じゃあ、じゃあ、すると。

マブセ博士 「分かったかね猿全六くん。君もこの病院の患者だということだ。

六 「嘘だ。

マブセ博士 「嘘ではない。もう少しくわしく言えば、猿全六というのは、君が夢想してい

る一人の少年にほかならない。

六「ええ?!

マブセ博士「なぜなら、それが君の病気の症状だからだ。眠らずして夢を見てしまう、猿全六くん、君のほんとうの名前は、ブドリだ!

六「ま、まさか!

十四号室「六!だまされちゃいけない。これはマブセ博士の心理戦術だ!

医師のひとりが十四号室の後頭部を殴る。十四号室倒れる。

六「野武さん!

マブセ博士「ハハハハハハハハッ!

マブセ博士歌う

合わせ鏡の宇宙

η 俺の脳髄には

二枚の鏡が向き合って

たっている たっている

いちまいの鏡には 心の地獄がうつり

もう いちまいの鏡には

鏡にうつった地獄がうつる

それは 狂人の弁証法

魂のふるさと

そして風だと書いてある

それは 無限の集合論

ここ過ぎていくものは

すべての望みをすてよ と書いてある

この 宇宙が

巨大な二枚の合わせ鏡だと

いったい誰が知ろう

アハハハハハハハ

あははははははは

真理の笑い声が笑っている！

第一幕 閉

第二幕 ゲーム『ドグラマグラの塔』

1 d e a t h w i s h [希死]

小さな鉄格子の窓のある部屋に簡易ベッドがひとつ置かれ、その上に野武探偵が気絶したままになっている。六はなんとか窓から外を見ようと懸命だ。野武が目を覚ます。

野武「(頭を撫でながら) あー痛え、コブができたぞ。おっと、ここは何処だ？

六「気がついたんですか。

野武「ああ、ついた。ぼくたちはどうなったんだ？

六「あれから僕も目隠しをされて、ここに連れてこられたんです。

野武「すると、ここが何処かは分からないわけか。

六「野武さん、肩車いいですか。

野武「ああ、いいとも。

六の顔が窓に届いた。

野武「どうだい？

六「あれは公園墓地だ。野武さん、ここは塔ですよ。眼の前に地面があるから、ここは塔の地下室ですね。

野武「なるほど。塔の中に閉じ込められたのか。

六「野武さん、あの、

野武「いや、みなまで言うな。君の聞きたいことは分かっているよ。心配しなくてもいい

よ。君は猿全六だ。劇団21世紀ドッグスの俳優だ。ここの患者であるわけがない。ぼく

だってそうだ。劇団ではマブセ博士の芝居を稽古している。ぼくは演出の羽根月とは親友だからね、現実に行き起きている事件を芝居にしないかともちかけたんだ。どうだい、思い出してきたかい。ここにぼくたちが閉じ込められたことから考えても分かるだろ、マブセ博士の犯罪は現実に行っているよ。

六「すみません、混乱しちゃって。」

野武「マブセ博士というのは、そうとうにしたたかな奴だな。六くん、君は病院に来たと

きに、何か特別な音を聞いたりしなかったかい？

六「音、ですか。」

野武「そうだ。音でなくてもいい、光のようなものでもいい。」

六「そういえば・・・」

野武「何かあったかい？」

六「オルガンの音が聞こえていました。」

野武「それだ。」

六「オルガンの音がなにか？」

野武「特殊な催眠術だ。オルガンの音波にある特殊な波長が仕込んであったに違いない。」

そいつが君のアイデンティティを混乱させたんだ。ぼくの調べではマブセ博士の企んでいる犯罪というのがそれだ。

六「と、いうと？」

野武「虚構と現実をすり替えてしまおうというわけだ。」

六「虚構と現実を。」

野武「そうだ。もうすこし意図しているものをはっきり分かるように言うならば、虚構に

よって現実を侵略しようとしているらしい。

六「どうということなんですか？

野武「君は、ふと、あるひょうしに、『この日常は現実ではなく、嘘なんではないだろう

か』と思ったりしたことはないかね。あるいは、ありふれた日常のふとした出来事に、何者かの作為を感じたことはないかね。

六「あるかも知れません。

野武「たとえば、テレビが君の住んでいる家の近所の、そうだな、公園をブラウン管に映

しだしたとする。

六「天気予報のバックみたいに？

野武「そう、そうだ。そうするとその画像はどこか嘘のような感じがするだろう。

六「はい。

野武「ところで、実際にその公園に君がでかけて行ったとして、その公園を眺めると、た

しかにテレビに映っていた風景と同じものなだけけれど、どこか違う。そのとき、今まさに見ている風景のほうがどこか嘘のような感じがする。てな、経験がないかね。

六「あります。友達の家で強盗事件があったんです。それをテレビで見ている、そ

いで、そのあと実際にそこへ行ったんです。そしたら、何だか、テレビで見たときの方がホントらしくって、・・・そういう経験あります。

野武「さて、今度は画像には、奄美大島の伝統工芸を受け継いで今日も零細に働く老婆の

姿が映っているとする。老婆がその伝統工芸について語り、また、仕事の合間に海でもな

がめて弁当でも食べるとする。そうすると、それは画像に映っている限り、ほんとうのよ  
うに思える。ところが、現実のその老婆にあってみると、なんとなく普通の婆さんで、ま  
るでテレビでみた婆さんのニセモノに出会ってるような気持ちになる。そういうことって  
よくあるんだ。

六「はい。

野武「それでは、今度は君自身がその画像の中に登場したとしたら、そしてその画像を見

ている君がいるとしたら、はたして、ほんとうの君はどっちだ。君は画面の中で誰かにか  
たりかけ、あるいはお茶を飲み、あるいは街角をあるいている。さあ、すると、映しださ  
れている君というのは、ふだん誰かから見られているところの君だし、それを見ている君  
というのは、つまり誰かに成り代わって君を見ている君だ。そうすると、ほんとうの君は  
どっちだ。見られている方か、見ている方か。

六「それは、見ているほうが現実で、映っている方、つまり見られている方が虚構なんじ  
やないんですか。

野武「そうとは言い切れないだろう。

六「何故ですか。僕がそれを見ているんだから、見ている僕がホントウでしょう。

野武「では、いま現在の君はどうなんだ。君はいま、ぼくに見られている。見られている

君は虚構かい？

六「いいえ。

野武「君を見ている君はどこにいる？

六「それは、この僕自身です。

野武「でも、ここにいるのはぼくに見られている君だけだ。

六「でも、僕のことを考えている僕というのがいます。

野武「それは君にとっては存在するかも知れないが、君以外の、ぼくや他人にとっては、

君というのは、ここにいる君だけが現実だ。つまり、君の現実には常に見られている君ということになる。そういう関係でいうならば、果たして、画像の中の見られている君というのは虚構だろうか。そして見ている君は現実だろうか。

六「たしかに、いま僕は僕がここにいるということを見ています。ということは、僕は僕に見られているのですよね。そして常に他人に現実と思われているのは、見られている僕なんですよね。そうすると、テレビの画像を見ている僕というのが、あながち現実だとは言えないなあ。

野武「三島由紀夫という作家は、『金閣寺』という作品の中で主人公にこう言わせている

よ。『人の見ている私と、私の考えている私と、どちらが持続しているのでしょうか』

六「いったい、見ている方なんですか？見られている方なんですか？ホントウはどっちが現実なんですか？

野武「さて、それを決定するのがこれまた問題だ。つまり、それを判断するのはいったい

誰だ。君自身か、それとも第三者か。よしんば第三者だとすれば、その第三者の判断が正しいと判断する者はいったい誰だ？

六「どういうことですか？

野武「君とぼくとでここで、じゃん拳をしたとして、どっちが勝ったかを公平に判定するには、第三者が要るね。



六「はい。」

野武「ではその判定者の判定が公平であったかどうかという判定をくだすのは誰だ？」

六「それは・・・」

野武「こうして、次第に主体は主体の根拠を失っていくようにみえる。まさにそのとき、

その間隙をぬって、犯罪が企まれたとしたらどうだろう。

六「犯罪？」

野武「そうだ。希薄になった現実感覚に強固な虚構の畏がかけられるのだ。」

六「虚構の畏。」

野武「自分自身の死ですら虚構か現実か分からなくしてしまうほどの畏だ。自分が死ぬと

ころを自分で見ることができるんじゃないかという奇妙な錯覚に陥れる、畏だ。」

六「自分が死ぬところを、自分が見ている錯覚。・・・」

野武「ファミコンで主人公が何度も何度も死ぬような、そういう感覚だな。最もおそるべ

きは、「死」に対する恐怖の楔が、虚構の侵入によって取り払われる瞬間だ。人は「死」

を虚構として錯覚し、それならば、一度くらいなら死んでもいいような、いや、いやいや

いや、死んでみたいような気持ちになる。death wishだ。」

六「death wish？」

野武「死を希望する。希死だ。」

六「そうすると、マブセ博士の考えている犯罪というのは。」

野武「精神医学を用いた、一見自殺にしかみえない殺人の方法だ。というのが、ぼくの推

理の結論だ。」

六「(窓のほうを見て) . . . 日が暮れてきました。 . . .

## 2 塔の秘密

夜になった。野武探偵は先程から時計ばかり見ている。

六「時間が、何か？

野武「午後九時になるとこの扉が開くんだ。

六「ええ？

野武「もうそろそろだ。

と、ほんとうに扉が開く音がした。

六「? . . . どうして? . . .

野武「もちろんここから抜け出すためさ。

誰か入ってきた。タンザクだ。

タンザク「いるかい？

野武「ああ、いるとも。ここだ。うまくいったようだね。

タンザク「ああ。

野武「紹介するよ。タンザクくん。こちらは猿全六くん。

タンザク「タンザクです。

六「?・?・あの?・?・?

野武「彼はぼくの助手なんだ。この病院に潜入したのは、ぼくだけじゃないのさ。彼は金

庫破りの名人でね、どんな錠前でもはずしてしまうんだ。彼にはいつでもぼくを監視する

ように頼んであったから、ぼくが敵の手におちたことも分かっていたんだ。だから、消燈時

間が過ぎれば、きっとぼくを助けに来てくれると思っていた。

六「でも、よくここだって分かりましたね。

タンザク「表の扉を開けると、上に行く階段が三つあってな、それぞれにドアがある。面

倒臭いから、俺はまず下にきたんだ。

野武「階段が三つ。・・・

タンザク「ああ。

六「ドアも三つあるんですか。

タンザク「そうだ。下へきて、正解だったようだな。さてと、それじゃあ、俺は怪しまれ

るとやばいので、帰るよ。先生はどうする?

野武「もちろん、この塔を探るよ。

タンザク「分かった。そうだろうと思って、これは懐中電灯だ。俺は部屋であんたと将棋

でもさしているふりをすればいいな。

野武「ああ、頼んだよ。

タンザク「まかしといってくれ。

野武「気をつけて。

タンザク「ああ、そっちもな。

タンザクは去った。

野武「それでは、囚われの姫を救出に、塔の探検といくかな。

ふたり、出ていくと、眼の前にドアが三つ、それぞれランプのハート、スペード、ダイヤのAの絵模様で現れた。

突然にピンライトが彼等をとらえた。重く扉の閉じる音がする。

身構える二人に、襲いかかるのはマブセ博士の声。

マブセ博士「はははははは。脱出お見事というべきかな探偵諸氏。

六「マブセ博士！

野武「おちつきたまえ。これはあらかじめ録音された声だ。

マブセ博士「しかし、断るまでもなかるうが、そこはまだ塔の内側だ。いま外からの扉は

閉じられた。これはもはや開くことはない。さて、この塔の何処かに、君たちの捜している少女が幽閉されている部屋がある。そして、塔の外にいたる扉は最上階にあるとお教えしておこう。従って、その少女を助けてこの塔から脱出するには、君たちは塔の最上階ま



の少女の姿が見えた。

3 塔の問題——(二)

先程と同じ三つのドアがある。つまり、これは先程のドアの内側にあたるのだが。・・・  
野武がスペードのドアから出てくると、しばらくして六がハートのドアから出てきた。

六「あれ、野武さん？

野武「六くん。そうか、してやられたな。確率もへったくれもあつたもんじゃない。三つのドアはすべて同じところに通じていたわけだ。

マブセ博士「〔声〕その通り。ひとつひとつのドアがそれぞれ別の部屋に通じているなどとは、誰も言っていない。そんなことに驚いているようでは、永久にこの塔から出られんぞ。ハハハハハハ。この階の部屋の問題は君たちの眼の前にある。・・・

見ると、ワニが赤ん坊を抱いて座っている。

六「なんででしょう？

野武「ワニだな。どうみても。

六「でも、赤ん坊を抱いてますよ。

ワニが彼等を見た。

ワニ「ようこそ挑戦者たちよ。私は親切なワニである。だから教えてやろう。次の階へ行く道はこっちだ。しかし、ただでは通れない。

野武「おまえを倒していくのか？

ワニ「そのような野蛮なことは、私の趣味ではない。君たちがここを通る権利を得るためには、この私から赤ん坊を守らねばならない。

六「赤ん坊を守る？・・・守るつたって、じっさい、赤ん坊はおまえの手の中にあるじゃないか。

ワニ「そのとおりだ。そして、私はこの赤ん坊が食べたくてたまらないのだ。イヒヒヒヒ。

六「このワニ、何が言いたいんでしょう。

野武「さあ。

ワニ「さて、挑戦者よ。よく聞くがよい。もし、私がこれから何をすることが出

来たなら、この赤ん坊は食べずにおいて、ここを通してやろう。さあ、どうだ。これから私は何をします？

六「それが、問題か？

ワニ「そうだ。さあ、これから私は何をします？

六「そんな問題があるかい。だって、こっちがどう答えても、おまえがそれ以外のことをすれば、正解にならないじゃないか。

ワニ「ここを通るには、私の問題に答える以外方法はない。さあ、これから私は何を  
する？」

六「野武さん。」

野武「困った問題だな。」

六「どうしたらいいんでしょう。」

野武「困った問題には、困った答えでこたえてやろう。」

六「え？」

野武「分かったよワニくん。『君はこれから、その赤ん坊を食べてしまおうだろう』これが

答えだ。

六「どうということなんです？」

野武「論理の矛盾というやつだ。ぼくの答えが正解ならワニは赤ん坊を食べなくてはいい

ない。そうすると、正解の場合『赤ん坊を食べずにおく』というワニの約束に反すること  
になるね。」

六「はい。」

野武「もし、ぼくの答えが違っているなら、ワニは赤ん坊を食べるということ以外の何か

しかできない。どちらにしても、ワニは赤ん坊を食べることは出来ない。つまり私たちは

赤ん坊をワニから守ることができるわけだ。みたまえ、ワニはパラドクスに悩んでいる。

さあ、次の階へ行こう。」

悩むワニを尻目にふたり、行ってしまった。



## 4 塔の問題——(2)

ふたりが行ってしまったと、ワニも悩みながらひっこんだ。

と、行ってしまった別の方向から、また六と野武が現れる。つまり、かれらは見た眼には同じところに出てきたかのように思える。

六「また、ドアがあります。どうしましょう。

野武「どのドアから入っても出る場所が同じなら、ドアを選択しなければならない理由は

ないが、今度は気分を変えてダイヤのエースにするか。

六「はい。

ふたり、ダイヤのエースのドアに消えた。そして、六だけダイヤのエースのドアから現れた。つまり、このドアは二人が別々のドアから入ると同じ場所に出、同じドアから一緒に入ると別々の場所に出るといふ、矛盾したドアらしい。

六の眼の前に六の『家庭』が現れた。猿全がカレーライスを煮込み、デン子はファミコンに熱中している。これが虚像なのか空間をワープしてしまったのか、それはまだ六には分からない。

六「なんだよこりゃ！

六の存在に猿全もデン子も気付いてはいないようだ。つまり、さながら六は幽霊のごとくそこにいるらしい。

猿全「どうだいデン子ちゃん、いい点出たかい。

デン子「今やつと二階に上がってきたところ。

猿全「二階というと、もうちよつとじゃないのかい？

デン子「まだ三階と四階があるから、まだまだだよ。

六「デン子。

デン子「？あれ、お父ちゃん、なんか言ったかい？

猿全「何にも言わないよ。

デン子「あたいのこと、呼ばなかった？

猿全「いんや。テレビの音じゃないのかい。

デン子「そうかな。

六「デン子、俺だ。俺が見えないのか。

猿全「どれどれ、（と、テレビを覗きこんだ）ああ、いいとこだな。ここをクリアすると

次は三階だな。三階には何があんのかな。

デン子「さあ、まだ誰も三階には行ったことないって。

猿全「お父ちゃんなんか、この塔の中に入るところまでしか出来ないからな。デン子ちゃん

んは優秀だな。

デン子「六兄ちゃんも、三階にはまだ行ってないんだ。ここんところでも失敗するっ

て言ってた。

猿全「今日はクリアできそうかい。

デン子「うーん、わかんない。・・・おっと、あぶない。

猿全「(画面をみながら) あ、何か出てきたぞ。

デン子「うん、これ味方の探偵なんだけど、敵が変装している場合もあるんだ。

野武が現れた。

野武「六くん。

六「あ、野武さん。何処へ行ってたんです。

野武「あのドアは別々に入ると同じところに出て、一緒に入ると別々の所に出るらしいな  
どうも。

六「そうなんですか。

野武「この人たちは？

六「実をいうと、このふたりは僕の家族なんですが、

野武「家族？

六「はい。でも、このふたりには、僕たちのことは見えならしいです。

野武「するとマブセ博士の得意とする心理戦術か。それとも立体映像かな。

六「かも知れません。

野武 「この人たちは何をやっているんだ？」

六 「ファミコンですよ。」

野武 「ファミコン？」

六 「ええ。あれは最近出たゲームで、『ドグラマグラの塔』というんです。」

野武 「『ドグラマグラの塔』」

六 「はい。高い塀に囲まれた広場に塔が立っているんです。その塀をクリアして広場に入

り、広場をクリアすると今度は塔にのぼっていくんです。『ゼビウス』のようなシューター  
ーものと、『ポルトピア』のようなシミュレーションものをうまくミックスしてあるゲー  
ムです。」

野武 「ふーん……」

六 「このゲームの難しいところは、ゴールがはたして何であるのか、あらかじめ知らされ

ていないところです。一応、塔の何処かに閉じ込められている少女を救いだすんですが、

救い出すと、今度は塔から脱出できなくなるなんてうわさまであります。」

野武 「ふーん。ところで、この部屋の問題は、いったい何だ？」

六 「何なんでしょう。」

野武 「次の階にあがる階段は何処にあるんだ。」

六 「捜してみましよう。」

ふたり、上手に消えて下手にまた現れる。

野武「どこにもないな。

六「あのドアからもどれないかな。

六、ドアのひとつを開けようとする。と、その背後から野武がナイフを出して、六に近づく。ドアが開いた。

六「開きました。（振り向く）

野武が六にナイフを突き立てた。

六「うわーっ！

六と野武、ドアの向こうに消えた。

デン子「ああ、やられちゃった。

猿全「え、やられちゃったのかい。

デン子「うん。やっぱりあの探偵が贋物だったんだ。

猿全「そうかい。残念だな。もうちよつとだったのに。

デン子「まだ一人、残ってるから、いいよ。

猿全「おや、そうかい。

デン子「今度はうまくやるぞ。さあ、こい。

ドアから、また六が出てきた。

猿全「どうだいデン子ちゃん、いい点出たかい。

デン子「今やつと二階に上がってきたところ。

猿全「二階というと、もうちよつとじゃないのかい？

デン子「まだ三階と四階があるから、まだまだだよ。

六「デン子。

デン子「？あれ、お父ちゃん、なんか言ったかい？

猿全「何にも言わないよ。

デン子「あたいのこと、呼ばなかった？

猿全「いんや。テレビの音じゃないのかい。

デン子「そうかな。

六「デン子、俺だ。俺が見えないのか。

猿全「どれどれ、（と、テレビを覗きこんだ）ああ、いいとこだな。ここをクリアすると

次は三階だな。三階には何があんのかな。

デン子「さあ、まだ誰も三階には行ったことないって。

猿全「お父ちゃんなんか、この塔の中に入るところまでしか出来ないからな。デン子ちゃん

んは優秀だな。

デン子「六兄ちゃんも、三階にはまだ行ってないんだ。ここんところでも失敗するって言った。

六「この部屋の問題は何なんだ！ いったい何をクリアすればいいんだ。

デン子「この階でき、みんな悩んじゃうんだよね。だってこの階のこの部屋って、出てき

たはいいものの、何をすればいいのか分かんないんだよね。制限時間はどんどん過ぎちゃ  
うし、登場人物はただウロウロするだけなんだ。

猿全「ほえー、そうかい。そいでデン子、おまえには、分かったのかい？

デン子「もちよ。

猿全「そうかい。

六「何なんだ。教えてろデン子。

デン子「なんか、このへんを、さつきから風みたいなのが、ふやふやしてるんだけど、何  
だろう？

六「おい、デン子、デン子ってば・・・駄目だ。・・・

デン子「あつ、また探偵が出てきた。

猿全「今度は本物かい？

デン子「へへへへ。デン子ちゃんには、分かってるぞ。

野武が現れた。

野武「六くん。あのドアは別々に入ると同じところに出て、一緒に入ると別々の所に出る

らしいなどうも。

六「野武さん。ホンモノでしょうね。

野武「なんだい、ぼくのニセモノが現れたのか。

六「ええ。そいで僕にナイフで襲いかかってきましたよ。

野武「大丈夫だ、ぼくはホンモノだよ。

デン子「と言ってるけど、ニセモノなんだよね。

猿全「ほえー、そうかい。

デン子「この探偵をやっつけると、この階はクリアできるんだ。

猿全「へー。

六「ほんとにかデン子。(野武を見た)

野武「おいおい。

六「野武さん、この階の問題 (problem) が分かりましたよ。

野武「ちよつと待てよ。

六「探偵をやっつけるんだそうです。

野武「ぼくをかい？

六「はい。

野武「おいおい、冗談言うなよ。

六「野武さん、ナイフ持ってませんか。

野武「そんなぶつそうなもの持ってないよ。

六「ほんとに？



野武「ああ。

と、六、ちゃぶだいでキャベツをきざんでいた猿全から、菜っ切り包丁をひったくると、野武に構えた。

野武「待て、六くん。これは罠だ。マブセ博士の心理戦術だ。

六「とか、なんとか言って、また僕を襲うつもりだろう。

野武「待て、六。

六「えい。

六、野武に斬りかかった。野武は思わずナイフを抜く。

六「ほらやっぱりそうだ。ナイフ持ってるじゃないか。

野武「あれ？いや、これは・・・いつのまにこんなものを？

六「しらばくれても駄目ですよ。いきますよ野武さん。えい。

野武「待て、やめろ！これは罠だ。

六「だって、探偵を倒さないとここクリアできないんだもの。

六、また野武に襲いかかる。野武も応戦しだした。まるでふたり、デン子が操るファミコンの登場人物のように、闘い始める。そして、とうとう、野武が追い詰められた。

六「やっぱりニセモノなんだ。ホンモノの探偵がこんな弱いわけないもの。」

野武「六くん、ぼくはホンモノだ。・・・待て、待ってくれ、助けてくれ。探偵なんての

が格好よくて強いのは、ハードボイルドの中だけだ。ほんとうはこんなもんなんだ。

六「言い訳は聞きません。僕はさつきあなたに油断して殺されてるんですからね。えーい

死ね！

六の菜っ切り包丁が野武を刺した。

と、後ろのドアが突然ボタンと音をたてて全て開いた。

デン子「やった！とうとうやった。ついに三階だ。」

六、ドアのひとつに飛び込んだ。またドアが全て音をたてて閉じた。

## 5 塔の問題——(3)

同様にドアから六が出てくると、今度は保育園が現れる。保母さんが園児を相手にお遊戯を教えている。

保母「はい、では〇〇ちゃん、みんなの前でチュウリップをつくってみましょう。みんな

は○○ちゃんがやったとおりに真似をして、チュウリップをつくりましょう。はい、○○ちゃん出てきて。

○○ちゃんが両手でチュウリップをつくった。みんなも真似してそうする。

保母「それでは、チュウリップが風にゆれますよ。

みんなそういうふうにする。

保母「はい、よくできました。それでは今度は、○○ちゃんにお星さまをつくってもらいましょう。

○○ちゃんが両手で星をつくった。簡単なボディランゲージだ。

保母「星がキラキラ光ます。はい、よくできました。それでは、今度は六ちゃん、

六「え？

保母「六ちゃんにやってもらいましょう。

六「何をつくるんですか？

保母「六ちゃんにはお船をつくってもらいます。

六「船？

保母「みんなもよくみて、六ちゃんの真似をしてね。はい、六ちゃん、お船です。  
六「船？」

チュウリップや星なら両手でそれらしいものを表現できるが、はたして、船はいつたい、  
どうすればいいのだろう。六は悩む。

六「ふ、ね……。

保母「早くつくって、六ちゃん。

六「(ええい、ままよ……と船を漕ぐしぐさをする)

保母「違うちがう！」

六「……

保母「船はこうでしょ。

と、保母さんは両手で自分の両頬をひっぱった。

六「？何で、それが船なんですか。

保母「それは、これが船だと決まっているからです。では、船ができなかった六ちゃんに

は、今度は雨をつくってもらいましょう。これができなければ、次の階にあがれません。

六「雨？！」

保母「はい、どうぞ。

六「ちょっと待ってください。そんな・・・」

保母「それじゃヒントです。これが雪です。（両手で自分の両頬をひっぱった）

六「それ、船じゃないんですか。」

保母「小指を見て、ほら、離れているでしょ。これが船、これが雪ね。はい、それでは雨をつくって。」

六「(困った)・・・ええい、出鱈目だ」

六は出鱈目に雨をつくったが、

保母「まあ！・・・雨だわ。まさか、ほんとに・・・よく分かったわね。」

六「出鱈目のでまかせのマグレアタリの偶然だ。神さま、感謝します。」

ドアが開いた。

## 6 塔の問題——(4)

ちょうど塔の屋根裏部屋らしく、傾斜した窓が空を見ている。そこから外に出れば、塔の屋根だろう。

六とそっくりの少年がひとり、背中を向けて椅子に座っている。床に囚われの少女らしい

女のこがしなだれて座っている。

六が現れた。

六「……………」

六とそつくりの少年「……………六ちゃん。

六「……………」

六とそつくりの少年「六ちゃん、やっと来たね。

六「誰？

六とそつくりの少年「ここが塔の一番上だよ。この窓から外に出ると、もうそこは塔の屋

根だ。

六「……………誰なんだ君は？

六とそつくりの少年「僕の名前はブドリだ。

六「え！きみがブドリか。

ブドリ「そうだ。ここはボクの病室なんだ。

六「君は、たしかこの塔から飛び下りたんじゃないのか。

ブドリ「六ちゃん、囚われの少女を助けに来たんだろ。

六「ああ、少女を救い出して、ここから脱出するんだ。

ブドリ「それはできないよ。

六「どうして？

ブドリ「少女はもうすでにボクが救い出したんだ。このこがそうさ。

少女「こんにちは。

ブドリ「ね、助けられてしまったものを、もう助けることはできないだろ。

六「君は何者なんだ。こつちを向け。

ブドリ「救い出されてしまったものを、どうやって救い出すのか、それがここの問題なん

だよ。

六「君は、

ブドリ「分かったよ。ボクのことはいま説明してあげる。それからついでにここの問題の

答えも教えてあげる。でもね六ちゃん、そうするとボクか君か、どちらかひとりが死ななければならなくなるんだ。

ブドリが振り向いた。口だけが外に出ている白い無表情な面をつけている。

ブドリ「ボクの病気は無眠症といって、まったく眠らない病気だ。眠らないけれど、普通

の人が眠っているときに見る夢を、見ることができない。起きたまま夢を見ることができないんだ。そこでボクが見ている夢は、六ちゃん、君の夢だ。ボクが六ちゃん、君になつてこの塔にのぼってくる夢だ。つまり、

六「つまり、これはブドリ、君のみている夢だというんだな。

ブドリ「そうだよ。

六「そして、僕は、この猿全六は、君の夢見ているところの猿全六だというんだな。

ブドリ「そのとおりだよ。

六「まるで『鏡の国のアリス』じゃないか。

ブドリ「そうだね。

六「それじゃあ、当然僕にも同じことを言う権利があるはずだ。

ブドリ「うん、それはこうだ。『いいや、これはブドリの夢ではない。僕が、猿全六が見

ている夢だ』だろ？

六「そのとおりだ。

ブドリ「だから、それはこのさいどちらでもいいことにしよう。そのどちらが正しいかを

決めることが、この階の問題ではないからね。どちらが夢見ていようとも、現にいまこう  
いう状況があることにかわりはないもんね。

六「なるほど。

ブドリ「そこでこの問題の答えだ。君はこの少女を救い出さなければならぬ。しかし

この少女はボクが救い出した。救い出されたものはもう救い出すことは出来ない。じゃあ  
どうしたらいいのか。要するに、この少女を救い出したのは君だということになればいい  
んだ。幸い君はボクに見られている夢だ。そうすると、ボクは君自身だ。ということは、  
君はボク自身であればいい。つまり、ボクは六で、君はブドリだ。そうすれば、この少女  
は君が救い出したということになる。これがこの階の問題の解決法だ。さあ、今から君は  
ブドリ、ボクが六だ。

いつのまにかあのオルガンの音がしている。



ブドリ「そうして、ブドリを消去しよう。そうするとここには六の救い出した少女と、六自身が残る。君は消えるべきだ。

六「！」

ブドリ「怖がらなくてもいい。君に死ねといっているのではないよ。君はボクに夢見られている存在なのだから、ボクが夢から覚めれば君は消去される。だから、ボクがそぬから覚めればいいんだ。

ブドリは斜窓を開いた。

六「何をする気だ。

ブドリ「ボクはいま、この塔の屋根から飛び下りる。

六「なんだって！」

ブドリ「夢から覚めるために、ボクが夢見ている君を消去するために。

ブドリ窓の外に出た。

六「待て。やめろ。

六に少女がしがみついた。

少女「タスケテ、タスケテ、私ヲタスケテ。おニイサマ、おニイサマ！

六「何をするんだ。離せつ。

少女「タスケテ、タスケテ、私ヲタスケテ。おニイサマ、おニイサマ！

オルガンの音が激しくなってくる。

六「ああ、頭が、頭が痛い！

野武が飛び込んできた。

野武「六くん！

六「野武さん。

野武「しっかりしろ。オルガンの音を聞くな！これこそマブセ博士が企んだ犯罪だぞ。

六「ブドリが、ブドリが。

野武「よし、ぼくが行く。もしブドリがこの塔から飛び下りたら、六くん、次は君がブド

リとなって、この塔のこの部屋でその少女とともに、次にブドリとなる少年がやってくるのを待つはめになるだろう。オルガンの音を聞くな！

と、野武探偵、窓に近づくが、何を躊躇っているのか、窓枠に足をかけたり外したり。

六「どうしたんですか？

あの少女は、まだひつこく六にしがみついている。

野武「六、君はこう思っていないか。探偵というのは誰でも勇気があって、格好よくっ

て、運動神経があつて、高い屋根なんかへいちやらだと。しかし、六くん、探偵の中には  
虚弱体質の者もいるし、神経衰弱の者もいるし、腺病質の者もいるし、高所恐怖症の者も  
いるんだ。

六「高いところ駄目なんですか？

野武「（頷いた）

六「僕が行きます。

てなことを言ってる間に、『ブドリ！』という叫びを残して、窓の外に何か落下した。  
何かとはまさしくブドリ少年そのものである。

六「あつ！

野武「しまった！遅かったか。

六、少女を振りはらつて、野武のいる窓際に駆け寄った。

と、天を轟かして、マブセ博士の笑い声。

マブセ博士「ハハハハハハハハハハ。……ゲームはここまでだ。時間切れだよ。全ての扉は閉ざされる。そして青酸ガスがこの塔に充満するだろう。

窓に扉がおりた。あちこちの扉の閉じる音がする。

六「野武さん！

野武「おのれ、マブセ博士。

青酸ガスが吹き出してきた。

六「野武さん！

野武「くそつ、残念だ。……

ふたり、青酸ガスの中に倒れ、マブセ博士の笑い声だけがこだましている。  
はたして、正義は悪の前に破れさるのだろうか？……

## 7 逆転、劇

マブセ博士の部屋。ノキバ、ササノハをはじめ、白衣の悪魔たちが集っている。マブセ博

士の犯罪成功を祝って、これから乾杯というところだ。

ノキバ「みなさん、御静粛に。それではこれから、マブセ博士の研究実験成功をお祝いして乾杯したいと思います。マブセ博士どうぞ。

マブセ博士「諸君。私の研究実験は、今回もみごとに成功した。昔から、失敗は成功のもとはというが、私の場合、実験は成功のもとだ。ハハハハハ。現段階においては、実験対象は無作為抽的に実験対象を選び、より多くの人間を対象として、その人間を死に至らしめる。あらゆる人間の虚構と現実の間に死の願望をすべりこませ、あたかも、死というものが虚構であるかのように錯覚せしめ、より多くの人間を希望のうちに自殺へと誘うのである。みんな死ね、勝手に死ね、だ。ハハハハハハ・・・

ノキバ「では乾杯を。

マブセ博士「諸君、乾杯だ。

と、

—— 『待った!』という声がする。そうこなくっちゃ、話にならない。

マブセ博士「ん？

ノキバ「誰だ!

ドアが静かに開いて、入ってきたのは、死んだはずのブドリ少年だ。ちゃんとあの面をつけている。

マブセ博士「ぶ、ブドリ！？

ノキバ「そんな馬鹿な。

マブセ博士「死んだはずだ。

ブドリ「ふふふふ。そんなバカでも、こんなカバでも、僕はブドリだ。

マブセ博士「まさか。

ブドリ「マブセ博士の犯罪実験で塔から飛び下りたはずのブドリは、いま、地獄の一丁目

からもどってきたのさ。

ノキバ「ええい、取り押さえろ！

と、耳をつんざく銃声一発。白衣の医師や看護婦たちが、驚く声をあげて左右に分かれると、そこに背を向けて立っている同じ白衣の者ひとり。握られた拳銃からは硝煙がたちのぼっている。

マブセ博士「なんだ今度は？

—— 「ふふふふ・ふあふあふあつハツハツハツハ。

ノキバ「何者だ！

—— 「この世に悪の栄えたためしはない。・・・というのはほんとかどうか分からないが、とりあえず、この世に悪の栄えた冒険探偵物語はない。

ノキバ「何をまだるっこしいことを言っている。こっちを向け。

マブセ博士「まさか、きさま。・・・

——「そのまさかだ。

振り向いて白衣をとった。野武探偵だ。あたりまえだよね。

しかし、まあ、一応連中は驚いた。

マブセ博士「お前、脱出したのか。

野武「そうだ。

マブセ博士「すると、そっちのブドリは。

ブドリ「(面をとった。六だ)猿全六さまだ。

マブセ博士「いったいどうやって、あの青酸ガスの塔から脱出した。

六「その答えはこの少女だ。

六はあの少女をドアから入れた。

少女「オニイサマア・・・

六「あのゲームの最終解決法の鍵は囚われていた少女自身が握っていたんだ。あの青酸ガ

スの中で僕はこう考えた。このゲームはファミコンの『ドラマグラの塔』と同じなんじゃないだろうか。少女を助けだすと、塔からの脱出が不可能になるんじゃないだろうか。

それなら逆に少女に助けてもらえばどうだろうか。そこで僕は少女にこう言ったんだ。助けて！……あの青酸ガスは、みんなこのこが吸い込んでくれた。

マブセ博士「なんだと？」

野武「その少女は青酸ガスに強い特異体質だったのだ。」

六「おまけに、掃除機のような呼吸器を持っていたんだ。」

少女「スーハーハーハーハー。」

マブセ博士「むむ、無茶くちなな。」

野武「驚くのはまだ早い。そのうえその少女はすこぶる怪力で、塔の扉をぶち壊してくれたのだ。どうだ。」

少女「うおおおっ！

マブセ博士「うーん、あきれるしか手はないな。」

野武「ぼくたちだって、呆れている。しかし、呆れようが驚こうがマブセ博士、お前の悪

運はここまでだ。聞こえるだろうサイレンの音が、ぼくの部下のタンザクが、警察に連絡をとったのだ。」

サイレンの音する。

ノキバ「博士。……」

マブセ博士「ハハハハハハハハ。いやはお見事。この本の作者の性格をもっと考慮に

いれるべきだったよ。まさかこのような結末になるとはな。ま、しかし、たいした逆転劇



だ。では、その逆転劇に乾杯させてもらおう。

マブセ博士ひとり杯を仰いだ。

マブセ博士「ぬっぬっ、うっうっ、（喉を掻き巻る）  
ノキバ「博士！」

倒れるマブセ博士。

野武「毒をあおったか。

六「野武さん、ぼくたち、勝ちましたね。

野武「（うなづいた）

サイレンの音、次第に大きくなって。・・・

## 8 エピログ

猿全の家。大きな笹飾りの下で猿全はカレーライスをつくっている。デン子は卓袱台（ちやぶだい）でファミコンに夢中だ。

猿全「さ、できたよ。おい、デン子、ゲームかたづけな。

デン子「うん。（と返事はしたがかたづけの様子はない）

猿全「ほれほれ、さあ、デン子ちゃんのぶん。今日は牛肉が入ってんだぞ。

デン子「うん。

猿全「ほれほれ、早くかたづけな。

デン子「うん。（と、片手でゲームしながら、カレーを食べ始める）

猿全「デン子ちゃん、お行儀悪いよ。

デン子「六の兄ちゃん、うまくやってるかな。

猿全「ん？発表会かい。うーん、うまくやってるさ。

デン子「見にいけばよかったね。

猿全「照れるから見に来るなって、そう言いやがったから、仕方ねえや。

デン子「やった！クリアした。

猿全「こら、デン子、いいかげんにしねえか。

デン子「うん。もうやめる。（やっとスイッチを切った）

猿全「ごはん、こぼしてるよ。

デン子「うん。ねえお父ちゃん。

猿全「ん？

デン子「今日のカレー、美味しいよ。

猿全「え、へへへ、そうかい。

デン子「六兄ちゃんにも残しておこうね。

猿全「もちよ。

ふたり、うれしそうにカレーの団欒。

と、羽根月が演助と出てくる。演助は台本をかかえている。

羽根月「それではキャストを発表いたします。呼ばれた方は台本を取りにきてください。

えー、21世紀ドッグス第〇回公演は北村想作の『BUDORI——眠れぬ夏の月』に決  
定いたしました。キャストイングですが、まず、怪人マブセ博士、〇〇さん。

〇〇さんが出てくる。拍手がパラパラとある。演助が本をわたす。

羽根月「よろしくお願ひしますよ。

〇〇「はい。がんばります。

羽根月「次、十四号室と野武探偵、これは〇〇くん。

〇〇くんが出てくる。拍手がパラパラとある。演助が本をわたす。

羽根月「よろしくお願ひしますよ。

〇〇「はい。がんばります。

羽根月「次、ノキバ看護婦長、〇〇さん

〇〇さんが出てくる。拍手がパラパラとある。演助が本をわたす。

羽根月「よろしくお願ひしますよ。

〇〇「はい。がんばります。

こうして次々に台本を手にした人が舞台に多くなる。ある者は台本をさっそく開け、ある者は他の者と歓談している。そうして、最後に……

羽根月「では、最後に、主役の猿全六、これはブドリにやってもらうことにした。

みんな拍手する。六が出てきた。いや、もう彼は六なのかブドリなのか分からない。私もみんなにも彼自身にも。

彼「はい。ありがとうございます。しっかりとがんばります。

彼は台本を開いた。そして、最初の台詞を読み始めた。  
ゆつくりと、コーラスが始まる。

り  
そう あれは月の夜だった

古いおるがなが うたっていた

おまえ のための子守唄を うたっていた

でもおまえは眠れない

おまえは悪い夢をみているから

眠れないでいる

おまえは だあれ

おまえは だあれ

と夢がたずねる

そうあれは 夏の夜だった

あおい月に おまえは言った

夢よ 私に私が誰 と聞くのなら

夢よ 私は聞き返す

夢よ 汝こそ なにももの

問いかえしてやる

おまえは だあれ

おまえは だあれ

と問いかえしてやる

そうあれは 星の夜だった

くらい闇が 道をたずねた

すると おまえはおまえの空をゆびさして

だまって 笑っていた

だまって 笑っていた

だまって 笑っていた

デン子が彼にカレーライスをさしだした。彼は微笑んでそれをうけとった。  
ゆっくりと眠るように舞台の灯がおちる。

END

1986, 5, 15

北村想